

平成22年度第2回山形県教育懇話会（平成22年8月3日開催）

委員発言要旨

◇今後の教育施策の展開方向について◇

【「いのち」を大切にし、豊かな心と健やかな体を育てる】

（後藤委員）

- 「いのちの教育」の取組みを焦点化して、県民運動的な盛り上がりのあるものにできないものか。例えば、読書活動を象徴的な取組みとして掲げてみてはどうか。本県は、歴史的に見ても国語教育の実践や読書活動の面では実績があり、国語の力は全国に誇れるものがある。「読書県山形」として、良い取組みができるのではないか。
- 関連して、第5章第5節「県民参加型の教育行政を進める」の部分に、「教育の日」制定に関する記載があるが、読書活動を県民運動として取組んでいくことを、「教育の日」の取組みとして考えてみてはどうか。

（山口委員）

- 先日、米沢市内で開催された「いのちの教育」フォーラムにおいて、横峯吉文氏の講演会が行われたが、その経営されている幼稚園での教育実践を聞いて、幼児のポテンシャルの高さ、潜在的な能力や限りない可能性を実感した。
- 全ての人間は自ら学ぶ能力を持っており、子どもたちの「やる気のスイッチ」を入れる、大人の側からの「仕掛け」が重要なのであって、駄目な人間は誰一人いないということだった。この実践を踏まえ、本県が進める「幼児共育」についても、もう少し突っ込んだ取組みができないものか。

（無着委員）

- 県PTA連合会では、「親子読書運動」の取組みを進めていく予定だ。本県は全国との比較では、「日頃家庭で読書をする親」の割合が低いとのデータがあり、まず親が生涯学習の姿勢を見せる必要があるのではないか。
- 「親子読書運動」を通して、生涯学習を進め、親子で学び、親子のコミュニケーションを活性化させ、親子の絆を一層深めていくことが大切だ。今年度は実践事例を集め、来年度の具体的な取組みを検討していく予定だ。

（柴田委員）

- アメリカでは、幼児期に「砂場で遊ばせる」ことを重視しているが、これは、他との関わりの中で様々なことを学ばせるというもの。また、自然に触れさせ、育てた子どもは、将来、社会で幅広く活躍しているというデータもある。このことから、小学

校ぐらいまでは「遊び」というキーワードを入れることも必要なのではないかと。自然の中での「遊び」を復活させ、「読書」と「遊び」を併せて示す必要がある。

- 大学でも、自らを表現できない、主張できない学生が多く見受けられるが、これは、訓練されていないことによるもの。幼児教育の段階から、本を読ませ、親と話しをして、「遊び」を通じて、自分を主張する力を育成する必要がある。

(池田委員)

- 5教振の目標の中に「・・いのち輝く・・」とあるが、基本方針の「いのち」、「まなび」、「かかわり」、「元気」が並列になっていることに少々違和感を持っていた。「まなび」以降の内容は、教師や教育委員会などの取組みの有り様であるが、これに対して「いのち」は、捉え方が一人ひとり違う。学校教育とか社会教育と違う視点で「いのち」を捉えて整理してみてもいいのではないかと。
- 幼児期の「遊び」というものは、大人の介入や、大人が設定した指標もないものだ。そのような環境で、子どもたち一人ひとりが生きて、自分を大切に思い、学んでいく。
- 「読書活動」には賛成であるが、日常の生活があつての読書だと思う。常に自然に目をやり、季節を感じる生活があつて、読書があると思う。

(高山委員)

- 幼児共育については、赤ちゃんの段階から生涯学習社会を意識しておかないと、その部分だけを切り取った形になってしまうのではないかと、少々心配している。総合的に、0才段階からの「かかわり」や「まなびあい」ということにしていってはどうか。
- 読み聞かせをしてみて、まず「わらべ歌」から入っていくことが望ましいと考えている。肉声や季節感、昔遊びなどが関連し、穏やかな波長のもと進めることができる。

(阿部委員)

- 「いのちの教育」には、①「自尊感情」②「つながりと多様性」③「人としての生き方」と3つの柱があるが、「自尊感情」が無い子どもは②も③もない。
- 「自尊感情」は家庭で培われるものだ。乳児期に母親との間で自尊感情を育まないと、人に関心を寄せたり関わったりする力が弱くなってしまふ。「まなび」や「かかわり」という前に、自尊感情を育てなければならない。
- 子育てを通して親も子どもと一緒に育って行く、「共育ち（ともそだち）」という考えがある。そういう子どもと大人の共感的な関係が「幼児共育」の中にあると、「いのちの教育」もより深いものになるのではないかと。

(國眼委員)

- 子どもたちは本当の意味で大切に育てられているのだろうか。一人ひとりを見て育てられているのか。「学校化する社会」とも言われているが、家庭でも、何かできること、人よりはやくできることが評価され、学校も家庭も地域社会もすべて、何か達成することで評価される社会になってはいないか。
- 大学でも、自ら体験したことを表現できない学生がいる。幼児期に、文字と触れ合う

活動や学びが少なかったことによるものと思われる。したがって、「いのち」の部分には、原点に戻って、家庭でのかかわりを中心にして、地域へのかかわりへ広げていくという視点を持たせたい。

(山川座長)

○「いのち」、「まなび」、「かかわり」を貫くものは、「いのち」である。

【「まなび」を通して、自立をめざす】

(柴田委員)

- 教育で最も重要なポイントは「家庭」である。家庭教育は教育の原点であり、その後の教育への影響は絶大であるという趣旨で記載していくべきだ。
- 高校生ぐらいになると、本を読んだだけでは学べない世界や企業の姿を自分の目で体験をさせること、海外とか、親の職場、広く社会の職場を見せることが重要になる。
- 本県の65歳以上の人口割合は27.9%であり、超高齢社会に入っている。社会を支えていくためには、子どもたちが就く仕事を付加価値の高い仕事に変えていけるような教育にしていかなければならない。
- 中国から観光客が増加している現状では、英語教育、中国語教育を、普通科高校のリテラシー（読み書き能力）の一つとして、身に付けさせていく必要がある。農業高校、工業高校等だと様々な技術を身に付けられるが、普通科高校の子どもたちは、「裸」で社会に放り出されることになる。
- 「高大連携」は、高校の先生が大学と組んで、例えば組込みソフト（電気製品等を制御しているソフトウェア）を勉強するなど、大学で勉強し直して、高校に戻ってそれを子どもたちに教えるというように、教員同士を鍛えていくという点でも重要だ。

(高山委員)

- 学校図書館は、学習センター的な機能はもちろん、読書センター的な子どものオアシス、第2の保健室的な子どもの安心、安全な居場所となる場所となってほしい。
- 「読み聞かせ」を県民運動にしていくことが「まなび」とか「豊かなコミュニケーション能力」、「創造力」にもつながっていくのではないか。
- 「早寝、早起き、朝ごはん」、「昔遊び、わらべ歌」、そして、「読み聞かせ」の推進が必要だ。

(大場委員)

- 読書活動については賛成。人的な配置や図書購入はもちろん大事だが、お金がかかる。お金をかけないでやるためには、学校の先生に頑張ってもらうしかない。読書の技法を教員が学び、子どもたちに伝えていく。また、市町村では、学校の図書館に司書を雇ってほしい。そうした図書館が真の図書館だと思うし、その研修等も重要だ。
- 山形県こども読書活動推進計画の策定に委員として携わった。計画に実践事例が盛り込まれたことが本県の強みである。しかし、市町村では、計画について認知されてい

なかったり、司書の方が計画の策定に悩んでいたりする現実がある。県の計画策定後にどのような実践がなされ、何が足りなかったかを検証していかないと、市町村としても計画を策定しようとはならない。県として、市町村が策定できるようなものを示してもらいたい。

- 山辺高校を紹介したテレビ番組を見たが、自立に向けた教育というものが感じ取れた。「キャリア教育」はまさに生き方教育であることを強調していくべきだ。地域で活躍する人材を育成していくことが重要である。自校出身者だけでなく、他校出身の様々な先輩から話しを聞く機会が必要であり、そうした「人材バンク」が必要だ。

(鎌田委員)

- 「いのち」は頭だけでなく体を動かすことも大切。学校体育にも、低学年では「遊び」の部分が必要だ。のびのびと手足を伸ばし、声を出して遊べるような場所が減ってきており、学校体育に期待するものは大きい。
- 体育の授業にも総合型地域スポーツクラブなどの外部指導者を取り入れ、教師も「遊び」を通じた体力づくり、友達づくり、生命の尊さを学びながら進めていってはどうか。学校体育や部活動での連携、協働ができれば良い。
- 心を育てることは、健康である体を育てるという視点も大切だ。楽しく、スポーツを通じた人間形成を推進していくことが必要だ。

【広い「かかわり」の中で、社会をつくる】

(後藤委員)

- 今日、「魂」をいかに育てていくのかが問われている。祖父母や父母が生の声で「読み聞かせ」や「とんと昔」などを行ったり、自然に入っていったりすることは大切であり、語り部研修会や山形ふるさと塾フェスティバルなどは大いに進めてほしい。

(池田委員)

- 自らが主体的に学びとっていくものが「まなび」であり、そのような場、環境をつくってやるのが大切だ。この「まなび」は、「かかわり」の中から生まれ、「いのち輝く」姿につながっていく。少人数学級編制は、その主体的な「まなび」のチャンスを広げるものである。
- 一人ひとりの主体的な「まなび」が保障されるのであれば、普通教育とか特別支援教育とかの区別なく、子どもたちの「いのち輝く」姿が見られるものと思う。

(國眼委員)

- キャリア教育は、社会で人と人とか関わっていくことを学ぶものであり、今日、中学校の職場体験学習＝キャリア教育として捉えられていることには違和感を持つ。
- 自分のことだけを考えるのではなく、人と人とかいかに関わりあって社会ができていくのか、社会への理解や働くことの意義も踏まえて、キャリア教育を進めてほしい。好きだから、興味があるからだけで将来を考えるキャリア教育は矮小化されたものだ。

○キャリア教育が浸透してきたにもかかわらず、ある調査では「働くことに気がかりがある」という生徒が74.4%もいる。自分の職業を決めるのがキャリア教育ではなく、自分がどのように社会とかかわり、自分の役割を果たしていくのか、そして自立していくかという視点を盛り込んでいく必要がある。

(阿部委員)

- 「まなび」で大事なことは、自らが学びたいと思うかどうかだ。幼児にとって「まなび」のきっかけは、ささやかな好奇心であり、好奇心を自分の力や大人の手を借りて満たすことで自己肯定感が生まれ、意欲や探究心につながり学ぶ力の土台になっていく。子どもにそうした環境を与えられる大人がいるかどうかも重要だ。
- かかわりという点で言えば、子ども同士、思いの違いや意見のズレが生じてても、お互いが共感出来る経験を積み、思いや意見の違いを恐れない子どもになっていく。自分の意見も言うが相手の意見も聞く。そんな子どもは、折り合いを付けながらみんなと一緒に遊べる子どもになっていく。それが幼児期の子どもにとっての人とかかわる力だ。

(鎌田委員)

- 楽しくないと継続できないし、真剣には取組めない。誰にでも「楽しく」スポーツに親しめる環境というように、「楽しく」を挿入してほしい。
- スポーツにおいても、本物に触れる機会を設けてほしい。運動が苦手でも、スポーツ観戦するのが楽しいというような子どもを育てていきたい。
- 今の子どもたちは、「歩く」ことが減っているのではないか。親子で歩く事業を展開してほしい。体育協会など、ノウハウを持った指導員がいるので活用して頂きたい。学校行事、学級行事、PTA行事などで考えてほしい。

(山口委員)

- 学校教育と社会教育の連携が必要である。忙しい学校・教員ということは理解するが、校長先生のマネジメントが大切である。音楽や美術などでは、地域の人材の活用を推進すべきである。

【学校と地域を元気にする】

(無着委員)

- 教員評価にあたっては、励みになる温かみのあるものであるべき。数字だけの評価ではなく、総合的に評価を行うべき。
- 「いのち」、「まなび」、「かかわり」すべてがかかわりあっている5教振ということが見えてきた。子どもたちの将来の生きる姿を見据えて、我々がやるべきことを盛り込むことに見直しの意義がある。
- 特別支援教育については、普通学級と一緒に学べる中で共に育つという面もあるが、特別支援教育は必要なものであるため、バランスを持って行ってほしい。

(後藤委員)

- 「教師のゆとり創造アクションプログラム」に取り組んでいるが、そろそろ大きく見直しを行うべきだと思う。最終的には教員を増やさないと解決はしないと思う。
- 5教振の見直しのフレームについて、第4章「重点的に取り組むべき施策」とあるが、今日の議論を踏まえて重点化を図ってほしい。

(池田委員)

- 徐々に見直しの視点が明らかになってきたようだ。基本目標に「・・『いのち』輝く人間の育成」とあるので、4つの基本方針のつながりを明確にすべき。4つを貫く「何か」という視点で見直しを行ってほしい。

(大場委員)

- 教員の多忙化については、私自身も実感している。教員が多忙感を持つのは、授業等には直接関係ないアンケート調査等の事務を行わなければならない時などに多いことから、これらは簡潔かつ必要最小限にすべきだ。普段の授業を大切に作る学校づくりが必要だ。

(山口委員)

- 担任の先生の存在をもう一度原点に戻って考える必要があると思う。一人ひとりの生徒の様々な個性と向き合い、じっくりと腰を据えて話し合い、個性を伸ばすために、担任の先生に時間をたっぷり与えてしっかり生徒と向き合えるよう、他の先生方が応援団として機能するような学校づくりが必要だ。
- 校長先生が重要である。校長が変われば学校が変わるといわれるように、校長は知恵を出し、知恵が無ければ汗を出し、汗が出なければ辞表を出すくらいの気概が必要だ。
- 素晴らしい理念を持つ「5教振」、「いのちの教育」をもっと県民に知ってもらうための、アピールする場が必要だ。

(山川座長)

- 「教育県山形」というのは、ややもすると歴史上のものだけになっていないか。「財政の福岡」、「理論の長野」、「普及の山形」として三大教育県の一つといわれたが、財政も理論も今日につながるものだ。今日の山形はどうか。これからの「教育県山形」はどうあるべきか。見直し計画では、柱を打ち出し、イメージをつかめるようにしていきたい。今後幾次にわたって教育振興計画が立案されていくと思うが、何か軸となるものがあるべきだと思う。今日の「教育県山形」はこういうものだと言ってみたくていいという思いがある。

以上